

早稲田大学の正門

早稲田大学 名誉教授 中 江 秀 雄

1. はじめに

正門の無い大学として知られている早稲田大学には昔、正門があったのである。しかし、その詳細は必ずしも明らかにされていないので、筆者は長年、正門の歴史を追ってきた。その結果、使われなくなった大学2代目正門（詳細は後述する）を、早稲田大学鑄物研究所（現：各務記念・材料技術研究所）の初代所長 石川登喜治先生が、時の総長 田中穂積先生より譲り受け、研究所の正門に使用したことを明らかにしてきた。そして、この経緯を早稲田学報に記述した¹⁾。正確には、この門は大正14（1925）年から1935（昭和10）年迄、大学の正門として使われてきたもので、鑄物の街・川口で造られたことが明かになった。本報告はこれらの経緯を取り纏めたものである。

伊東²⁾は『早稲田ウィークリー』に、大正5（1917）年ころの早稲田大学の正門（初代正門とする）を図1のように示している。ここで伊東は、「明治から大正にかけての時代、正門は現在の南門の辺りに置かれており、新図書館（現2号館）が竣工した大正14（1925）年、正門もまた新装（2代目正門）され、現在の通用門の辺りに移動した。この門は4本の角柱の間に4枚の鉄扉がはめ込まれ、中央の2枚は観音開きという仕様である（図2）。いかにも仰々しい。下って現在の正門（正確には門扉が無くなった入口）が完成したのは昭和10（1935）年。柱も扉も大胆なまでに一掃されたその姿は、もはや門であって門ではなく、自由な大学の象徴へと生まれ変わった。」としているが、初代、2代目の正門が何時、何処で造られたのかは明らかになっていなかった。

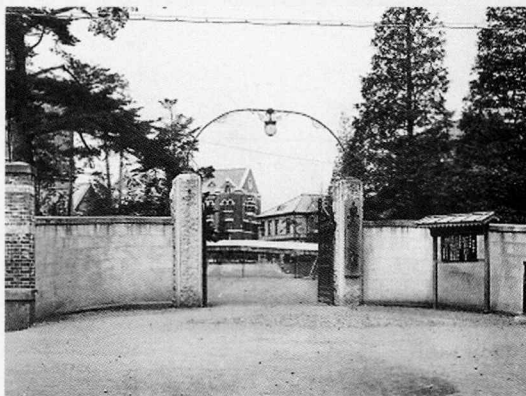


図1 大正5（1917）年頃の早稲田大学の初代正門¹⁾

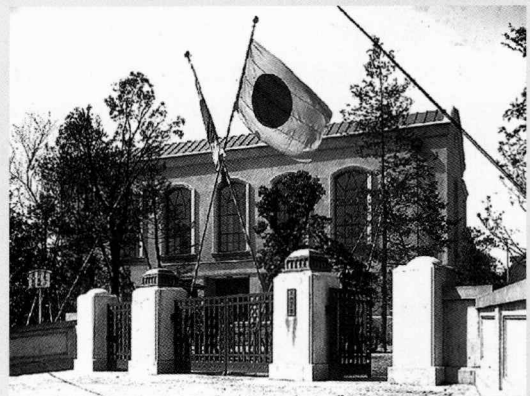


図2 昭和5（1930）年3月撮影の早稲田大学の2代目正門と図書館

2. 2代目正門の歴史

一方で、大正15（1926）年頃の早稲田大学の構内配置図を図3に掲げる。ここに示されているのは図1の初代正門ではなく、図2に示した2代目正門である。また、ここには大隈講堂が点線で示されており、建設中と記されている。大隈講堂は昭和2（1927）年10月15日に竣工したのであるから、大正15年のこの図には存在していないのは当然である。その代りに、大正13年に完成した図書館の前に（2代目）正門が、現在位置とは異なると付記されて示されている。この図書館前の2代目

正門を昭和5（1930）年3月に撮影した写真は既に図2で示した通りである。2代目正門は4本の角柱の間に4枚の鉄扉がはめ込まれ、中央の2枚は観音開きという仕様である、と伊東²⁾は記述している。図2より、当時の2代目正門は中央の2枚の観音開きの門と、その左右の2対の片開きの門から構成されていたことがわかる。

昭和2（1927）年に2代目正門は早稲田大学に設置され、昭和10（1935）年にはこれが撤去され、早稲田大学は門の無い大学となった。そして昭和13年の鑄物研究所開設に伴い、初代所長石川登喜治先生（図4）がこの門を田中穂積総長から譲りうけ、鑄物研究所の正門とした（図5）のである。石川先生は

元海軍造機中將で昭和12年に早稲田大学に教授して招かれ、鑄物研究所の所長を務めるとともに、日本鑄物協会（現：日本鑄造工学会）で初代会長を務められた、わが国の鑄造業界を代表する研究者でもあった。

先にも述べたように、2代目早稲田大学の正門は昭和13（1938）年10月21日に開所した早稲田大学鑄物研究所の玄関前で2度目のお勤めを果たすことになったのである（図5）。この時には、2代目正門は中央の2枚の観音開きの門扉と、その左の片開の門扉からなる構成へと変わっていた（図2の右側の片開門扉が無くなっている）。これは鑄物研究所の正面の道路幅が狭かったため、片方の片開門を設置しても無駄であったためではなかろうかと推測している。

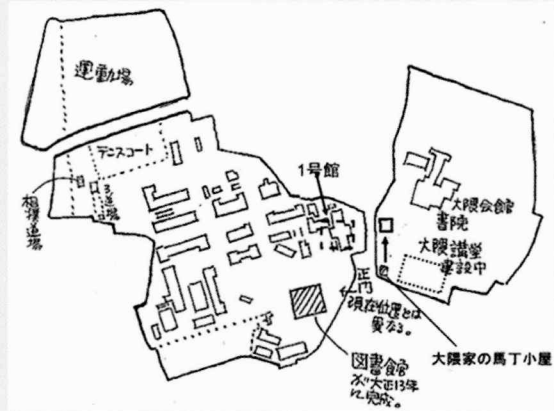


図3 大正5（1926）年頃の早稲田大学の構内配置



図4 鑄物研究所初代所長の石川登喜治先生³⁾

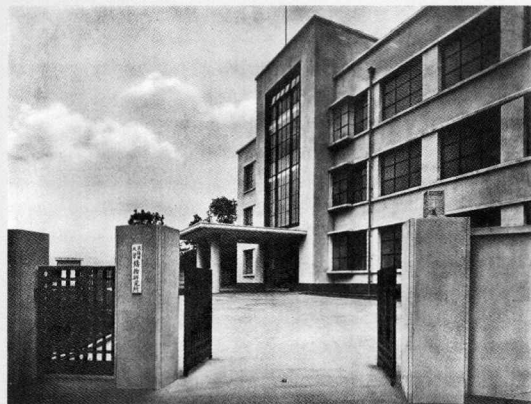


図5 創業当時（1938年）の鑄物研究所外観と正門³⁾

3. 2代目正門の誕生

筆者が長年にわたって早稲田大学の正門の歴史を追いかけてきたさなか、川口の知人、永瀬 勇氏から次のような一報が入った。『永瀬氏の友人である佐々木朋正師のフェイスブックに、早稲田大学の正門の記事が掲載されている』とのことであった。そこで永瀬氏に昨年の11月に、筆者と佐々木師、永瀬氏が顔を合わせる機会を催していただいた。その時の佐々木師と筆者の写真を図6に示す。この時に佐々木師は、実家に掲げてあった『早稲田大学の正門に関する額』を持参して会場にいられた。図6ではその額を中心に佐々木師と筆者の2人が映り込んでいる。この額内の資料が佐々木師のフェイスブックの基でもあり、それらの映像を写真撮影させていただいたものが図7と図8である。

図7は佐々木師が持参した本家の額から撮影させていただいた『鑄物製の早稲田大学正門の完成記念の書』で、ここには『記念』の文字が大きく朱で書かれているのが幽かに読み取れる。しかしこのままでは読み難いので、これを筆者なりに解説したものを次に示す。

「故大隈侯爵の事績にして我国私学の権威たる早稲田大学構内に付属図書館の新設せらるるに當り須崎鑄工場表玄関の扉（右掲たるもの）及び正門跡に校庭外周構柵の製作を復命依須崎鑄工場より當木型所に



図6 本家の額を持参した佐々木師（左）と筆者（右）

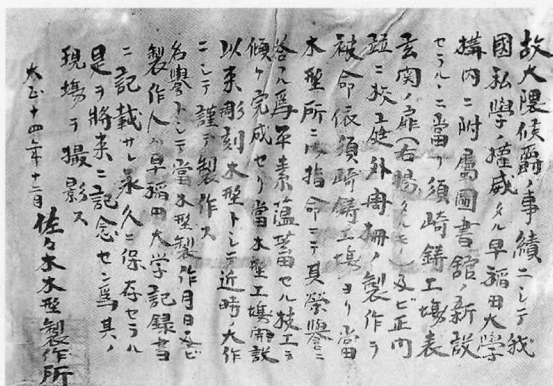


図7 早稲田大学正門（鋳物製）完成記念の書
（記念との朱記あり）

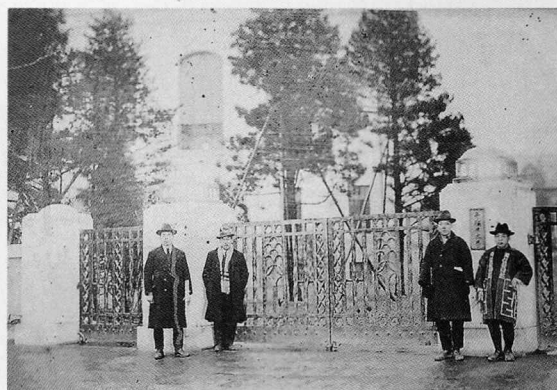


図8 完成した早稲田大学正門前での記念撮影
（大正14（1925）年12月）

御指名にて其榮譽に答える為平素蘊蓄せる技工を傾け完成せり旨木型工場開設以来彫刻木型として近時の大作にして謹んで製作す。

名誉にして當木型製作月日及び製作人は早稲田大学記録書に記載され永久に保存せらる是を将来の記念せん為其の現場を撮影す 佐々木木型製作所 大正十四（1925）年十二月」とある。早稲田大学の正門を製造したことの喜びに溢れている様子が目に浮かぶ書であった。

この文章を少し正確に読み解くと、川口の鋳物工場・須崎鋳工場が鋳物製の早稲田大学の第2正門門扉を受注し、その木型を佐々木木型製作所が製作したのである。その佐々木木型製作所の佐々木幸次郎氏は佐々木朋正師の祖父にあたるとのこと。この辺の事情は、佐々木師のフェイスブックに、「実家に残る祖父の書と写真を頼りに早稲田大学へ。大正15年に祖父が木型を作って須崎鋳工で製造された早稲田大学正門の門扉がまだ保存されているとの事。早稲田大学発展と共にこの門は鋳物研究所の正門になり、今は各務記念材料技術研究所（元鋳物研究所）の玄関前の植え込みに保管されている。戦時中の供出を免れる為にこの門扉は隠されて木製の門扉に取り替えられて国策に反してまで守られた由緒正しき門である！……90年以上の年月を経て触れた祖父の作品に胸が熱くなりました。」と佐々木師は書かれている。

そして、2代目正門の完成記念として大正14（1925）年12月に、正門前で記念撮影した写真が図8である。これには早稲田大学の正門前での佐々木幸次郎氏（右端）と須崎氏（右から2人目）が写っており、佐々木幸次郎氏が須崎鋳工場の半纏をきているのがわかる。この点については、佐々木師も何故この様な事態になったのかは理解できていない、とのことであった。

4. 2代目正門のその後

先に図5で示した鑄物研究所の正門は、昭和13(1938)年から平成9(1997)年4月まで使用されていた。しかし、トラックの大型化などに伴い、トラックなどが通過するには門扉の幅が狭すぎるとして、現在の溶接製の門に取り換えられた。そして、この旧正門は玄関前の植え込みの中に保存されている(図9)。この門は2枚の観音開きの門扉だけとなってしまった。またこの図右下には正門の故事来歴を記した揭示版の写真を張付けた。

図9の正門左側に、この門扉には不釣り合いな個所(修理跡)が認められる。鑄物研究所の元職員・江藤氏(溶接技師)に、早稲田学報¹⁾を送ると同時にこの修理跡について問い合わせたところ、「例の門扉は原因はわかりませんが、上枠にキレツを生じました。鑄鉄の溶接は非常に困難ですので(元職員の)小川氏と相談し、鋼板2枚とボルトで固定しその周囲を溶接したと、記憶しております。私も90歳になり、遠い昔の思い出となりましたが、忘れられないなつかしい門扉です。』⁴⁾との返信を筆者はいただいている。



図9 旧鑄物研究所の正門とその説明揭示板(右下)



図10 門扉の特殊形状(2本の振じれた縦棒)

この門扉には鑄物としてはなかなか手の込んだ部位がある。それを図10に示す。図の左端には前述の補修部であり、中央部には2本(全体では8本)の振じれた縦棒がある。この様に振じれた棒は木型を2分割することはできず、捨型の型込め技術により造型したことを想像させる。図解鑄造用語辞典によると捨型とは、『模型の半面を定盤上に置いて型込めを行うが、模型を平面に分割できない場合には模型の分割線までを埋める型を作り、この上に枠を載せて型込めを行う。この型を捨型と呼ぶ』。とある。当時の鑄物砂でこの手法で門扉を造るには高度な技術が必要であつたであろうことを推察させた。

5. 結びに代えて

筆者が長年追いかけてきた早稲田大学の正門の謎は忽然と解けた。それは、使命を終えた鑄物研究所の旧正門(2代目の早稲田大学正門)を鑄物研究所玄関先の植え込みに保存したことであつた。この正門脇に設置した故事来歴を記した揭示板を佐々木師が見たことに始まったのである。それを師がフェイスブックに載せたことで、早稲田大学の正門の謎を解く道が開けたのである。このフェイスブックに永瀬 勇氏が気付き、筆者に連絡いただいたことで2代目正門(鑄物)の歴史が一挙に解けたのであつた。

参考文献

- 1) 中江秀雄: 早稲田学報(2012, 2) 88
- 2) 伊東久智: 早稲田ウィークリー 1286(2012, 10, 11) 5
- 3) 中江秀雄ほか編: 材研報告 創立70周年記念号 No.65(2009) 7
- 4) 江藤祐春 私信(2012, 1, 26)